

# ティーチング・ポートフォリオの実践とその効果 —新任大学教員の事例報告—

森口 茉梨亜

徳島大学高等教育研究センター

## 1. はじめに

徳島大学では全学FD推進プログラムの一環としてティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（以下、TPWS）が「教育の成果や課題を整理し、教育業績を可視化するとともに、教育活動の改善につなげる」<sup>1)</sup>ことを目的に開催されている。筆者はこのTPWSに2023年と2025年に参加した。本発表では、TPWSの成果が、どのように教育の実践に活かされたかその効果について報告する。

## 2. TPWS 受講の目的

筆者は、高等教育研究センター創新教育推進部門の運営するイノベーションプラザに2019年より創新教育コーディネーターとして着任した。学生プロジェクト活動のマネジメントや施設の運営などの業務を中心として約4年半活動したのち、新任教員として学生指導に当たることとなった。新任教員の立場として学生と向き合うにあたり、大学で行う教育とは何か、自分自身がどのように指導をしていくべきかということを整理するために、TPWSに参加した。また、業務の多忙さや本人の性質上、じっくりと教育活動の振り返りをする時間を取ることが困難であったため、2年後に再度このワークショップに申し込み、改めて自身の教育活動の振り返りを行うこととした。特に、筆者が教育活動の振り返りを重要だと考えている理由として、①指導に当たる学生が学部1～2年生が多く、大学での学びを早く習得してもらうためにどのようにするのが効果的であるかを考える必要があること、②そのために筆者がすべきことを明らかにすることの2点があげられる。

## 3. TPWS の流れ

TPWSは1回目、2回目ともに、表1の流れで行われた。ここでは「ティーチング・ポートフォリオ・チャート<sup>2)</sup>（以下、TPチャート）を活用して、担当している教育活動を振り返り、今後の目標や改善の計画を立てる」ことを目的としている。このTPチャートを利用することで、自分自身の教育活動が整理・可視化される。TPチャート作成プログラムでは、いずれの回もTPチャート作成のみの参加教員との情報交換も行われた。

表1. TP作成ワークショップの流れ

日程	内容
1日目 12:00 -17:00	オリエンテーション アイスブレイク（昼食） <b>TPチャート作成</b> 第1回 個人ミーティング TP作成作業 情報交換会（任意参加）
2日目 9:00 -17:00	TP作成作業 第2回 個人ミーティング TP作成作業 意見交換（昼食） 第3回 個人ミーティング TP作成作業
3日目 9:00 -16:00	TP作成作業 第4回 個人ミーティング TP作成作業 意見公開 昼食 TP作成作業 プレゼンテーション準備 TP披露・修了式

#### 4. TPWS の成果

まず、TP チャートの相違について述べる。図2に示す通り1回目では、「方法」において実践しているタスクの記載が多かった。しかし、図3に示した2回目ではどういふことを学生にしてほしいかという行動を記載していた。これは、ヒントとして示された「いつも習慣で行っていること」「重要だと思っでていること」「複数の活動で共通して行っていること」を受けて、最も適当である方法を記載した結果である。次に、「方法」を受けて考えていく「方針」や「理念」ではほぼ変更がなかった一方で、「改善・努力」「成果・評価」を問う設問では新しい事柄を多く記載したことから、自身の成長が可視化された。1回目で立てた目標については、2回目受講時には、実はさっぱり忘れていたが、これまでの成果を2回目振り返った時に、図らずとも1回目の目標が達成できているものが多くあった。



図1. 1回目 TP チャート (2023 年度作成)



図2. 2回目 TP チャート (2025 年度作成)

#### 5. 考察

TPWS では同じ手法に基づいて、メンターに支援してもらいながら自己省察を行うことができた。2回とも実施プログラムはほぼ同じであったが、自分自身が成長することで、その時の TP チャートにおける細かな理解や気づきに変化が現れることが、成果物より示された。それは、自分自身が現時点で教育に対してどのような意識で取り組んでいるのかを再発見するきっかけとなった。また、メンターやその他の TPWS 参加者、教職員に自分自身の教育活動を披露する機会が何度もあることで、一方的な説明にならず、第三者への共有方法を認知することができた。これは、学生指導に当たる際、特に授業初回や活動前に何を学んでほしいのか、授業を受けてどのように成長してほしいのかを示す際の伝え方の指針を得ることにつながったと考えられる。さらに、「理念」がぶれなかったこと、「目標」が一つずつ成果となって表れていたことなどが可視化され、今後の教育活動に対するモチベーションが向上した。

#### 6. まとめ

新任大学教員である筆者にとっては、一人で教育活動の正当性に悩むよりも、自分自身の考えを整理し、他者の視点を建設的に取り込むことのできる TPWS は、今後の教育活動をポジティブに進めていくうえで効果的であった。また、文書化することで、自身の教育活動のステップアップを意識することができ、結果、多忙な中でも成果につながったこと、そしてそれを振り返ることができたことは、教育活動の評価資料として示すことのできる有効な手段として活用していきたい。

#### 参考文献

- 1) 南川慶二・吉田博・塩川奈々美・飯尾健 (2025) 「2024 年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告」, 大学教育研究ジャーナル第 22 号, pp.33-54
- 2) 栗田佳代子・吉田壘・大野智久 (2018) 『教師のためのなりたい教師になれる本!』, 学陽書房.